

研究報告

コロナ禍における有償援農ボランティア事業の運営方式と課題

今野聖士*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

1. はじめに

昨今、農業における雇用労働力不足が顕在化し、その対応として通年化・常雇化の動きが見られるようになった。しかし、常雇化するためには通年かつ一定の作業を確保する必要があることから、一部の大規模野菜作経営や通年型野菜産地以外は難しいのが現状である。とりわけ果樹や野菜産地では、個々の経営で見ると必要な労働力需要のピークが時期的に集中しており一定の規模を超えると臨時雇が不可欠となる。このような個々の経営での短期雇用を地域全体で連続化し、地域として雇用労働者を確保する調整システムが各地に形成されてきたが、天候による農作業スケジュールの不安定性は完全に解消できないため、臨時雇の存在が不可欠となる。一方で農村人口の減少、高齢化等により臨時雇の確保は困難となり、これまで以上に多様な「労働力」の給源、例えば障害者雇用やボランティア等に注目が集まっている。中でも大学生による援農ボランティアの取り組みはこれまでも一定の役割を果たしており、今後ますます重要になると考えられる。

具体的に今後の臨時的な労働力需要を補完できる作業者の給源を考えたとき、「期間限定的な雇用」「他産業と比較して同等以下の賃金かつ屋外労働」という労働者にとって不利な条件を受入可能である主体は少ない。しかし有償無償を問わず、ボランティアはこの例外であると考えられる。さらに、個々の主体の再生産ができない賃金水準の下でも、一定の再生産が見込める給源として、大学生があげられる。

以下今年の繰り返しになるが、「地方部、特に都市部から十分な労働力を調達することのできない遠隔地にある農村地域では、雇用労働力不足が農業生産場面に直接的な影響を与え、非機械化品目の作付減少といった“実害”が生じはじめている。名寄市においてもそれは例外ではなく、収穫時の人手不足を理由に特産の青果物の作付面積が減少する一方で機械化可能な耕種が増加している。特にアスパラガスは収穫時期が2ヶ月程度と短い事に加え、収穫のピークが一気に立ち上がることから雇用労働力に依存する部分が多く、昨今の労働力不足を反映して、作付面積の減少（更新の中止・延期や収穫量が少ない品目への転換等）が生じている。」

このような事態を受け、2018年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの研究事業として、援農ボランティア事業を実施している。2020年度も引き続きコミュニティケア教育研究センター、名寄市農務課、JA道北なよろ営農部営農課からご支援・ご協力を頂き、学生からも有償ボランティアの協力を頂いて事業を実施した。本稿では本年度の状況を整理した上で、今後の展望について確認していきたい。とりわけ本年はコロナ禍における影響を受け、募集・運営体制に変化が求められたことや、受入農家においても外国人技能実習生の受入が出来なかったこと、感染リスクをどう捉えるか、といった点で逡巡が生じていた。コロナ禍において対面調査が叶わないため、子細について記述できない部分もあるが、可能な限り状況を整理していきたい。

2. 援農ボランティア事業実施の経緯

本節では、事業実施の経過について今野(2019)から一部を引用するかたちで整理する。なお詳細に当たっては拙稿をご参照いただきたい。

2017年の春頃から、市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が農業者から寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、農家のアルバイト募集の情報を学生に何らかの形で紹介できないかと考えた。何人かの学生にインタビューを試みたところ、ほとんどの学生は飲食店・小売店等でアルバイトをしているが、農業に関してはあまり知識や関係性がなく、農業がアルバイトの選択肢に入っていないことが示唆された。農業アルバイトは名寄ならではの経験を得ることができ、金銭以上の体験を得ることができると考えられるため、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。結果、春夏期に計15名程度が農家アルバイトに従事した。

極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなり、2018年度に改めて組織作りと事業体制の整備を行った。

1) 2018年度の組織構成

事業名を「名寄市立大学生援農アルバイト事業」とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学は名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター(担当:センター企画委員兼本研究事業担当の教員)、市は経済部農務課(担当:課長)、JA道北なよろ(担当:営農部営農課長、アスパラ部会長、スイートコーン部会長)とした。大学は、コミュニティケア教育研究センターが通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援(問い合わせや募集など)を実施するほか、本事業をコミュニティケア教育研究センター課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部、また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。費用は主にリーダー役の学生に対する作業日誌入力およびアンケート回答に対する謝礼(リーダー手当相当)、研究に係る消耗品の購入である。

また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着(ツナギ)・雨合羽の貸与を受けることとなった。これは、農業がアルバイトの選択肢に入らない理由として、作業内容がイメージできないことに加え、準備するものにかかる費用が高いとの意見が学生から出ていたためである。このことにより、調整の煩雑さは増すものの、学生の参加するハードルが下げられたと思われる。

事業期間は2期制とし、1期を5月中旬～6月下旬、2期を夏休み期間中とした。主な想定作業は1期がアスパラ関連作業、2期がスイートコーンやカボチャ関連作業である。

2) 事業における雇用条件の統一

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチングを行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮(危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等)も万全を期した。以下具体的な雇用条件を示す。

基本的に事業では調整(受付・マッチング・サポート)のみ行い、実際の契約・雇用時間の調整等は学生と農家間で直接行う。時給は受入農家説明会当日に大学のアルバイト募集掲示板に掲示されている金額をベースに検討した。居酒屋等が850～860円程度、農業者が900～1000円程度で出稿しているため、それらを一定程度上回る水準に設定された。作業時間は1期の場合、実働8時間(休憩は午前15分、午後15分、お昼1時間を基本とし、その間は無休相当。お昼を除いて8時間半拘束、実働8時間相当)とした。但し実質的には休憩時間は学生の体調や天候・作業量等を勘案しながら調整を行う事とした。残業は当事者間で協議し、双方同意が取れる場合は実施出来る事となった。農業は労働時間制限の適用除外となっているが、今回は8

時間を越えた分は 125%で支払うものとした（学生が他産業のアルバイトと比較して選択していると考えられるため）。2 期の場合は①5:00～10:00 と②7:00～12:00 の 2 パターンを基本とした。時給水準はアスパラ事業を踏襲し、早朝の①パターンは+100 円の設定とした。そのほかの条件は 1 期と同一である。基本的に雨天決行とするが、極度な天候不順や作業の進捗等により半日で作業終了となる事もある。このような天候等による作業中止の可能性について、予め学生へ周知を行った。

送迎については農家が行う事とした（集合時間・場所等は当事者間で連絡して決定する）。

支払方法は現金日払いを基本とし、相談に応ずるとした。

安全面では、安全に留意し、危険な作業はさせないこととし、労災に加入を義務づけた。万一事故があった場合（送迎時を含む）には基本的に当事者間で対応とした。

服装等は、学生の費用負担を避けるため、高額な装備については市と JA で支援する事とした（長靴、作業服、雨合羽貸与）。手袋については農家側で準備し、支給する事とした。

3. 2020 年度援農ボランティア事業の経過

1) 事業の概況と実施スケジュール

表 1 に本事業の概要を示した。運営主体はこれまでと同様、本学、名寄市、JA 道北なよろで構成した。実施作業も同様で 1 期は 5 月中旬～6 月下旬、2 期は夏休み期間中（8 月中旬～9 月下旬）とした。受入農家戸数は 1 期 14 戸（昨年-2 戸）、2 期 10 戸（同-3 戸）となり、2019 年度より若干減少した。詳しくは後述するが、過年度参加農家が独自に学生と関係性を構築したことや、コロナ禍における状況を鑑みて学生ボランティアの参加を遠慮した農家があったと考えられる。参加学生数は 1 期 46 名（昨年-3 名）・2 期 37 名（同-8 名）とこちらも 2019 年度に比べて若干減少している。要因として、受入農家数が減ったこともあるが、前述のように個人的な関係性を持って本枠組みから外れた農家・学生がいたことや、PR 体制の脆弱化（後述）、特に 2 期はコロナの感染拡大時期に当たっていたため、学生の行動が実家に早期に帰省したグループと帰省をあきらめたグループに分かれたことも影響していると考えられる。

表 2 に事業実施にかかるスケジュールを整理した。例年 3 月末に 1 期の募集を農家に対して行い、受入希望者に集まって頂き、ボランティアの趣旨とスケジュール、事業実施体制等について説明し、有償の水準を決めて頂いており、2020 年度も踏襲している。ただし、コロナ禍における影響を受け、そもそも事業実施が可能かどうか、またどのような体制で実施できるのかが決められず、議論を先送りせざるを得なかった。とりわけ実施の判断基準となる 3～5 月は札幌における感染が拡大し、北海道独自の緊急事態宣言がなされたほか、全国でも緊急事態宣言が出され、本学の BCP（行動指針）レベルも地域活動・ボランティア活動が中止となる中、開催基準の策定に非常に苦労している。また学生への募集方法も、従来のような講義終了時や昼休みの説明会・相談会を実施することができず、デジタルサイネージ、オンライン講義の余白、説明サイト等を利用して広報するに留まった。参加学生に対する説明会も対面では実施できず（当時は資料取得以外の学内入構禁止）、すべて特設サイトとメールで対応することとなった。2

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当教員）
運営主体 名寄市経済部農務課(担当課長)
JA道北なよろ営農部(担当課長)
実施事業 アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業
実施時期 1期:5月16日頃～6月28日頃の土日中心 2期:8月17日頃～9月13日頃(夏期休暇期間中)
募集範囲 名寄市立大学 学生(学年問わず)
受入農家 1期:14戸 2期:10戸
参加学生数 (計画値) 1期:46名・延べ323名作業従事 2期:37名・延べ225名作業従事(事務局調整分のみ)

資料:事業運営資料を元に筆者作成
注:参加学生数は当初の計画値である。実際は作業進捗や学生のスケジュール変更、体調等による調整があり、若干の変動(主にマイナス方向)が想定される。

表2 事業実施に係るスケジュール

日付	内容
2019年12月頃	市役所・農協と事業開始検討について協議
2020年3月末	アスパラ生産組合全戸へ希望を照会
4月2日	農協と打合せ(実施最終判断)
4月15日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
4月27日	学生向け説明ビデオ配信開始・随時受付
5月8日頃	参加学生向け特設説明サイト公開
5月16日	1期作業開始
5月22日	作業服・長靴・雨合羽貸与開始
期間中随時	参加学生(リーダー)より状況聴取、対応
6月28日	1期事業終了・交流会中止
7月上旬	スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会
7月20日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
7月22日	学生参加受付開始(定員まで随時配置)
8月15日	2期作業開始
9月13日	2期事業終了・交流会中止

資料:事業運営資料を元に筆者作成

期もほぼ同様の流れであり、7月上旬に農家へ希望調査を行い、その後説明会において趣旨説明・有償水準の決定、募集を行い、事業実施に至っている。

2) コロナ禍の影響を受けた運営対応

2020年度は本事業もコロナ禍における影響を大きく受けることとなった。その運営側の対応について以下に記載する。

①開催決定まで

これまで、1回目の打合せを前年末、2回目の打合せを3月末に行っていた。打合せ自体は実施できたものの、3月末において通常通りの実施を確定することが出来なかった。特に本事業は本学の「ボランティア活動」に準じていたため、本学のBCPレベルが「ボランティアを含む地域活動」を禁止する段階にあると、事業の実施は困難となる。実際、一般的なボランティア活動は長期にわたって禁止となっていた。一方で、学生のアルバイト先が休業・売上減少したことで、アルバイト需要そのものが大幅縮小し、学生の家計補助が必要となっていることや、農林水産省から大学生による援農ボランティア・アルバイトについて特段の配慮を求める通知が行われるなど(本学にも上川総合振興局を通じて照会があった)、コロナ禍においても実施を求める状況が高まっていた。また、名寄市においては外国人技能実習生が入国できなかったことにより労働力不足が深刻となっており、農家側からも支援を求める声が上がっていたことから、可能な限り対策を行った上で、実施する事とした。ただし、本学のボランティア活動として実施する場合、本学のBCPレベルと連動(=実施不可)となるため、本年度に限っては、本学のコミュニティーケア教育研究センターを通じたボランティア募集の形式を取らず、実施事務局から各講義・実習等の担当教員へ直接協力依頼を行い、教員の既知の学生(具体的には過年度参加者および当該年度の講義履修者)に任意で紹介する形を取った。このため、全学的な広報手段を執ることが出来ず、学内説明会等も開催することが出来なかった(加えて当時は週1回の資料取得時以外学内入構禁止であった)。その影響が一部参加学生数の減少や、同居者にハイリスク者がいる農家の不参加による農家戸数の減少として現れていると考えられる。

②事業実施準備

実施に当たっては、前述のように、これまで対面で実施していた説明会を実施する事ができなかったため、全てオンラインで実施する事が求められた。このため、説明のための簡易な特設サイト・Zoom相談受付・GoogleFormsを利用した参加受付と貸し出し品の集約といったオンラインツールによる広報、連絡となった。その他、アナログの手段としては、学生が講義資料を受取に来る際にデジタルサイネージを設置して広報を試みた。

本事業の特徴である貸与品の貸し出しについても、対面による随時貸し出しが出来なかったことから、非接触で配布する方法をとった。具体的には無人の換気の良い場所(玄関の軒先)に各学生ごとに袋詰めした貸与品を班ごとに並べ、資料配付時に各自が回収する方法である。数名が受取に現れないというトラブルはあったが、概ねスムーズに実施できた。一方で、準備の負担が大きいことやサイズが合わなかった場合にその場での調整ができないといった課題もある。

とりわけ苦労したのが学生への連絡である。対面集合がなく、全てメール及び特設サイトによる連絡となったため、メールチェックの頻度が低い学生にアプローチすることが難しく、全体の調整に多大な時間と労力を要した。また、農家との対面式が実施できなかったため、電話のみで打合せとなり、初回の集合に苦労したであろう事は容易に推定できる。

③事業実施

事業の実施に際しては、新型コロナウイルス感染拡大防止策の徹底を学生・農家双方に強く要請した。基本的には農林水産省の「農業者に新型コロナウイルス感染者が発生した時の対応及び事業継続に関する基本的なガイドライン」を遵守頂くよう要請した。一方で、常時のマスク着用は熱中症の危険がある事から、十分な

換気・距離を取った上でマスクを外すことや、休憩の確保と言った安全管理について特に留意頂くよう要請した。結果、本事業による感染者が発生しなかったことは参加者一同の努力によるものであり、深く感謝したい。

④事業後

これまで、期中、終了後に対面式の意見交換会（学生および農家それぞれ個別に実施）を行い、参加学生・農家の意見を聴取していたが、今期は実施できなかった。このため、貸与品の返却時に少人数で個別に状況を把握したほか、これまで実施していなかった2期の参加者についてもアンケート回答を義務化し、状況の把握に努めた。また、各期終了後に学生・農家が一堂に会した反省会（ジンギスカンパーティ）を行っていたが、実施できなかった。単純な打ち上げ以上に、本事業の意義を確認する貴重な機会であったため、非常に残念な結果となった。

4. 事業の実績

1) 第1期事業の実績

表3に参加学生の属性を示した。1年生が30名と大半を占めたが、2年生が10名、3年生6名の参加があった。学科は社会福祉学科と栄養学科が多くなっているが、本年度は全学生に対する十分な広報が出来ていないため、情報のバイアスによるものと考えられる。表4に単純集計した農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月はのべ209回参加、6月はのべ173回参加、通期ではのべ382回

表3 参加学生の属性

1年生	30
2年生	10
3年生	6
4年生	0
男性	6
女性	40
栄養	14
看護	9
社会福祉	20
社会保育	3

資料:運営資料より筆者が作成

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家	I農家	J農家	K農家	L農家	M農家	N農家	総計	農家一戸あたり 単純平均
5月土日	8	10	11	9	4	6	7	8	14	7	8	8	13	6	119	8.5
5月平日	10	9	10	4	4	6	4	6	6	6	6	6	7	6	90	6.4
5月計	18	19	21	13	8	12	11	14	20	13	14	14	20	12	209	14.9
6月土日	17	16	18	9	9	12	9	11	14	12	13	10	11	12	173	11.5
6月平日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
6月計	17	16	18	9	9	12	9	11	14	12	13	10	11	12	173	10.8
総計	35	35	39	22	17	24	20	25	34	25	27	24	31	24	382	23.9
うち平日	10	9	10	4	4	6	4	6	6	6	6	6	7	6	90	5.6

注: 平日参加の場合も1回としてカウントしている

表5 個人別作業従事回数

班 個人	A				B		C		D		E		F				G				H			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
全日(8h)	14	15	15	10	8	11	13	12	5	9	5	4	9	2	5	5	6	5	6	6	9	7	7	
従事 時間帯 午前のみ	0	0	0	0	1	1	3	3	0	0	3	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
午後のみ	2	2	2	0	5	4	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
残業有り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
従事 回数 単純回数	16	17	17	10	14	16	16	15	5	9	8	7	11	4	6	5	6	5	6	6	9	7	7	
フルタイム換算	15.0	16.0	16.0	10.0	11.0	13.5	14.5	13.5	5.0	9.0	6.5	5.5	10.0	3.0	5.5	5.0	6.0	5.0	6.0	6.0	9.0	7.0	7.0	
班内 平均 単純回数	15.0				15.0		15.5		7.0		7.5		6.5				5.8				7.7			
フルタイム換算	14.3				12.3		14.0		7.0		6.2		5.9				5.8				7.7			

班 個人	I				J		K				L			M			N				
	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
全日(8h)	10	11	11	11	11	11	8	8	8	6	10	7	7	6	7	6	9	8	8	11	3
従事 時間帯 午前のみ	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	2	0	1	0	1	0	1	1
午後のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
残業有り	2	3	4	3	2	2	1	0	1	1	1	2	1	1	0	0	0	1	1	1	0
従事 回数 単純回数	10	11	11	11	11	11	9	9	9	7	10	8	8	8	7	7	9	9	8	12	4
フルタイム換算	11.0	12.5	13.0	12.5	12.0	12.0	9.0	8.5	9.0	7.0	10.5	8.5	8.0	7.5	7.0	6.5	9.0	9.0	8.5	12.0	3.5
班内 平均 単純回数	10.8				11.0		8.8				8.0			7.7			8.3				
フルタイム換算	12.3				12.0		8.8				8.0			7.5			8.3				

資料:運営資料より筆者作成

注: 残業は平日として計算。アンケート未回答者がいるため46名にならない。

の参加があった。平日は講義の関係からほぼ参加はなく、土日が中心となっている。農家ごとに参加人数に差があるため、単純平均の意味合いは薄いものの、平均してのべ20名の学生が農家の元に訪れたこととなる。同じく表5から個人別の作業従事回数を見ると個人ごと・班ごとに従事回数にやや差が見られる。また、本年も半日の参加はあまり多くなく、ほとんどが全日(フルタイム)参加であった。全体の状況を整理すると表6のようになる。学生1人あたりで見ると平均参加回数は9.3回(2019年度6.3回)、最も参加数が多い学生で17回(同12回)、少ない学生で4回(同1回)である。若干昨年より参加回数の増加が見られた。

表6 参加学生間の作業従事回数の平均値

単純回数平均	9.3
フルタイム換算平均	9.1
最大単純回数	17.0
最小単純回数	4.0
最大フルタイム換算	16.0
最小フルタイム換算	3.0
合計参加回数(単純回数)	411.0
合計参加回数(フルタイム換算)	401.5
合計参加回数(全日参加)	365.0
合計参加回数(半日参加)	46.0
全日:半日比	11.4:1
残業有り回数	27.0

資料:運営資料より筆者作成

注:アンケート回答者のみ(44名)

次に作業環境について整理した。表7、8に集合～解散時間の集計を示した。基本的なスケジュールは8時頃～17時頃の実働8時間であったが、開始時間は7時と8時に分かれており、実際のデータも半々に分かれている。開始時間が7時であっても集合時間は30分から1時間程度前になっており、拘束時間が長くないよう注意が必要である。また、集合から作業開始までの時間および作業終了から解散までの時間は、平均で20～30分程度を要しており、こちらも過度に長くないよう注意が必要である。

表7 参加学生の集合・作業開始・作業終了・解散時間の分布

集合時間	割合	作業開始時間	割合	作業終了時間	割合	解散時間	割合
～6:29	18.1%	～6:59	5.4%	～16:59	28.4%	～16:59	13.7%
6:30～6:59	31.9%	7:00～7:29	41.0%	17:00～17:29	63.6%	17:00～17:29	46.0%
7:00～7:29	6.6%	7:30～7:59	10.2%	17:30～17:59	3.7%	17:30～17:59	33.5%
7:30～7:59	37.3%	8:00～8:29	39.8%	18:00～18:29	1.2%	18:00～18:29	3.1%
8:00～8:29	2.4%	8:30～	3.6%	18:30～	3.1%	18:30～18:59	1.2%
8:30～	3.6%					19:00～19:29	0.0%
						19:30～	2.5%

資料:作業日誌より筆者作成

注:全日参加分のみ(半日参加データが少なくバイアスが大きいため除外した)

表8 参加学生の集合から作業開始、作業終了から解散までの概算時間の分布

時間	集合～作業開始	作業終了～解散
15分程度	14.5%	9.3%
20分程度	16.8%	37.8%
30分程度	55.5%	47.7%
45分程度	13.3%	2.9%
1時間以上	0.0%	2.3%
平均	28分	20分

資料:作業日誌より筆者作成

注:平均時間は0分の回答を除いている

表9 従事作業種類と従事割合(複数回答)

作業種別	MA割合
アスパラ関連作業	82.2%
スイートコーン管理作業	18.4%
カボチャ管理作業	18.4%
水稲連作業	5.7%
その他一般作業	46.6%

資料:作業日誌より筆者作成

注:総回答数174で各回答数を除している

表9に従事作業種類と従事割合(MA;複数回答)を示した。MA割合は回答数を有効回答数で除したものであり、全体の何割の回答者がその選択肢を選んだかがわかる(以下同様)。1期はアスパラの収穫を中心としているため、アスパラ関連作業に従事したものが8割以上であった。昨年度は天候不順によりアスパラ関連作業がごく早期に終了した例があったため約6割の従事となっていたが、例年並みに復帰した。それ以外ではスイートコーンやカボチャの関連作業が行われていた。

表10 農作業に参加した経験の有無

項目	割合
はじめでもしくは家庭菜園レベル	75.9%
数回経験あり	22.2%
農業アルバイトの経験あり	1.9%

表10に学生の農作業経験の有無を示した。7割以上が初めての経験であった。表11に援農ボランティア参加の動機を示した。8割以上がアルバイトの目的を持ちつつも、6割以上の学生が農作業体験を目的として参加している。農業・農村への興味や農家との交流を期待している学生も2割以上おり、ボランティアに期待する部分が垣間見える。表12に事業に参加するに当たり、予定していた回数通り参加出来

表11 援農ボランティア参加の動機(複数回答)

項目	MA割合
純粋なアルバイトとして	87.0%
農作業体験として	66.7%
土日のみというスケジュールが都合良かった	64.8%
農業・農村に興味があった	29.6%
農家と交流してみたかった	24.1%
農業を支援したいと思ったから	16.7%
食・農を知ることで自分の専門に役立ちそうだった	11.1%
去年お世話になった農家さんのところにまた行きたかった	1.9%
大学に入り、新しいことに挑戦してみたかった	1.9%
その他	1.9%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数54で除している

表12 事業参加実数と予定回数(複数回答)

項目	MA割合
予定以上に参加した	27.8%
ほぼ予定通りだった	59.3%
予定より少なくなった(天候が理由)	1.9%
予定より少なくなった(天候以外が理由)	11.1%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

たかどろかを尋ねた結果を示した。昨年は天候の影響を受け、参加数が予定より少なくなっていたが、今年は約6割が予定通り（ほぼ全ての土日）となった。表13には賃金水準の評価を示した。

表13 賃金水準の評価

項目	割合
非常に良かった(早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった)	44.4%
良かった(早朝・労働の大変さを考えても良かった)	37.0%
普通(早朝・労働の大変さを考えると普通的水準)	14.8%
悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)	3.7%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

本事業はボランティアといえども有償であり、金銭の部分とボランティアによる経験の部分、両方を合わせて適切な水準となる賃金水準の設定を志向している。最低賃金が増える中で賃金水準が据え置きになり、実質的に割引かれる中で概ね良かったと回答されていたことはプラスの評価として考えられ、賃金以上の経験を得ている（そのた

表14 今後の参加意向

項目	割合
積極的に参加してみたい	44.4%
参加してみたい	37.0%
どちらでもない	18.5%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

めの努力を農家が行っている）と評価できる。ただし、コロナ禍により学生の平常のアルバイトが減る中での評価でもあるため、次年度以降はその影響に注視が必要である。表14では、今後の援農ボランティアへの参加意向を尋ねたものを示したが、参加したくないとの回答はなく、参加してみたいとの回答が多くを占めていたことは

表15 今後農家と直接契約の予定があるか

項目	割合
ある(現在 従事中)	22.2%
ある(今後予定している・2期で参加する場合も含む)	20.4%
声はかけられたが未定	11.1%
予定していない	46.3%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注目に値する。加えて表15では、今後農家との直接契約（アルバイト）の予定はあるかを尋ねたが、4割以上が事業外での継続を志向しており、関係性が構築されつつあることを示している。

2) 第1期事業に係る学生の感想

学生との意見交換会が実施できなかったため、事業終了後のアンケート結果から学生の総合的な感想をいくつか抜粋した。

「いつも店頭に並んでいる野菜の出荷の流れを知ることができ、いい経験ができた。思っていた以上に大変な仕事でしたが、楽しみながら仕事できてよかったです。」

「お手伝いさせていただきお金を貰うという社会体験を初めてして、とてもいい経験になりました。全身の筋肉痛がなかなか取れないのは少し辛かったです。」

「コロナの影響でなかなか外に出られなかったこと、学校に行く機会がなく友達とあまりいかなかったことから、援農ボランティアに参加し体を動かしたことで他の大学生と知り合えたことが非常に良かったです。また、農業経験はほとんどなかったので、体験する機会としても良かったです。」

「コロナの影響で人と関わることで少なかったが、援農ボランティアのおかげで友人も増え、毎週楽しく過ごすことができたので良かったです。」

「援農ボランティアが始まるまでは、自粛でほとんど誰とも関わらず寂しいしとても辛かったのですが、ボランティアに行くようになって改善されました。農家さんと会話したり友達が出来たり、一生懸命やって汗をかいてお金を貰うことが毎週楽しみで仕方ありませんでした。最初は筋肉痛や早寝早起きが大変でしたが、野菜を沢山頂けたり家まで送迎していただいたりもして、とても良かったです。」

「去年のスイートコーンでお世話になった農家さんのところにまた行けたことで農家さんだけでなく学生以外のバイトの方々とも楽しく交流ができた。悪かったこと、辛かったことはありません。」

「今まではスーパーの野菜を高いなと思っていたが、援農ボランティアを経験して妥当な値段だと感じるようになった。」

以上のように食農教育の効果が得られていることが確認できる回答が多く見られた。一方で、

「レポートなどの課題が多い中、土日が両方潰れてしまう時が辛かったです。毎週課題に追われていました。また、ほとんど毎回のように残業があったことは、勉強との両立という面で大変でした。」

「気温が高い日の農作業は慣れていなかったため大変だった。」

といった、時間配分の問題や熱中症への危機管理等、継続して注意喚起すべき課題も散見された。次年度以降も引き続き改善に向けて努力したい(時間配分に関しては、班制度を取っているため、お休みを取る事が可能である。農家・学生双方に再度周知を進めたい)。

3) 第2期事業の実績

続いて本項では第2期事業の実績を各表から述べる。まず参加学生の属性を表16から確認すると、第1期事業と同様ほとんどが1年生・女性であり、学科は社会福祉・栄養・看護が多くなっている(理由も同様であろう)。最下段の「事務局調整」とは事業実施事務局が各農家に学生のシフト配置を行った(従前通りの)ケースである。農家独自調整とは、学生の配属と貸与品の貸し出しのみ事務局で担当し、シフト配置は各農家に一任する形式である。主に過年度の経験者が参加する場合に用いている。次に表17に旬別作業従事回数を示した。本年は2期においても可能な限り実績データを得るべく、作業日誌への記入を依頼した。残念ながら回収率は100%ではないが、最低限の実績データを得ることが出来た。期間を通じた参加回数は総計170回であり、未回答者が同一の水準で参加したと仮定した場合はほぼ計画値通り(225回)の232回の参加があったと推察される。表18に個人別の従事状況を示した。把握率(回答学生数/参加学生数)は73%である(表17も同じ)。1週間以上を最低参加期間に設定したため、平均参加回数は6.3回である。ただし、個人差が大きく、最大は22回である。コロナ禍における影響を受け、帰省をあきらめたため長く参加したいという学生が複数いたことから、最大値が大きくなっている。事実、参加回数は5~9回参加が44.4%で最大となっている。

表19に従事した作業の種類を示した。2期はスイートコーンの作業が中心となるため、スイートコーン関連作業へ全員が従事していた。その他の作業はカボチャ関連作業に約半数が従事していた。

表20には農作業に参加した経験の有無を示した。1期と同様に初めての者が46.2%と最多であるが、1期を含めたリピーターが43.8%を占めていることが特徴的である。

表21に援農ボランティア参加の動機を示した。7割を超える学生が選択した理由が上位から「夏休み期間というスケジュール設定」「アルバイトとして」「農作業体験を目的として」である。また、5割を超える

表16 参加学生の属性

1年生	21
2年生	13
3年生	3
4年生	0
男性	11
女性	26
栄養	12
看護	6
社会福祉	15
社会保育	4
事務局調整	22
農家独自調整(貸出)	15

資料:運営資料より筆者が作成

表17 旬別作業従事回数
(単純集計・回答があった分のみ)

期間	参加回数
8/17(月)~23(日)	66
8/24(月)~30(日)	42
8/31(月)~9/6(日)	32
9/7(月)~13(日)	28
9/14(月)以降	1
8月計	116
9月計	54
総計	170
従事日数	30
1日あたり最大従事人数	12
1日あたり平均従事人数	5.8

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は作業日誌に記入があったもののみ(27名分)を集計しているため、実際は上振れしている可能性が高い(未回答者が同一の比率で参加していると仮定すると232となる)

表18 個人別作業従事回数

項目	参加回数
回答者数	27
把握率	73.0%
総参加数	170
最小参加数	1
最大参加数	22
平均参加数	6.3
1~4回参加	37.0%
5~9回参加	44.4%
10~14回参加	11.1%
15回以上	7.4%

資料:運営資料より筆者が作成

表19 従事作業種類と従事割合(複数回答)

作業種別	MA割合
スイートコーン関連作業	100.0%
カボチャ関連作業	48.2%
その他作業	26.5%

資料:作業日誌より筆者作成

注:総回答数170で各回答数を除している

表20 農作業に参加した経験の有無

項目	割合
はじめもしくは家庭菜園レベル	46.2%
今年の1期に参加したので2回目	19.2%
昨年以前に参加した事がある	34.6%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表21 援農ボランティア参加の動機(複数回答)

項目	MA割合
夏休み期間で好きな期間というスケジュールが都合良かった	80.8%
純粋なアルバイトとして	76.9%
農作業体験として	73.1%
農家と交流してみたかった	57.7%
食・農を知ることによって自分の専門に役立ちそうだった	26.9%
農業・農村に興味があった	19.2%
農業を支援したいと思ったから	7.7%
一期のボランティアが楽しかった	3.8%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

注:各選択肢を回答総数26で除している

学生が農家との交流を望み、自身の専門分野との関連性を考えている学生も2割弱存在している。1期と比較して農家との交流を期待する回答が2倍程度に増えていることから、ボランティア活動によって金銭ではない経験を期待する意向が見て取れる。表22は事業への参加回数が当初の予定通りであったかを尋ねたものである。6割以上がほぼ予定通りであったと回答している。一方で約30%が予定より少なくなったと回答している。農業は天候や生育の影響を大きく受けるため、予定通りの参加回数を確約する事は難しい。受付時にも「概ね申し込みの半数は作業に従事できるよう努力しますが、保障は出来ません」という説明を行っている。農家も自らの作業が不足する場合は、別の作業を作り出したり、参加農家間で作業・学生の融通を行うなど調整に努めているが、完全はあり得ない。とはいえ、相互理解と努力を続けることが肝要である。

表22 事業参加実数と予定回数

項目	割合
予定以上に参加した	3.8%
ほぼ予定通りだった	65.4%
予定より少なくなった(天候が理由)	11.5%
予定より少なくなった(天候以外が理由)	19.2%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表23 賃金水準の評価

項目	割合
非常に良かった(早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった)	30.8%
良かった(早朝・労働の大変さを考えても良かった)	53.8%
普通(早朝・労働の大変さを考えると普通の水準)	15.4%
悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)	0.0%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表24 今後の参加意向

項目	割合
積極的に参加してみたい	46.2%
参加してみたい	46.2%
どちらでもない	7.7%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表23には賃金水準の評価を示した。1期と同様に悪かったという評価はなく、学生が金銭以上の経験を得ることが出来たと考えられる。表24には今後の援農ボランティアへの参加意向を示したが、1期よりもより積極的な選択がなされている。実際、貸与品の貸し出し延長を希望する学生(=事業後も継続して農家でアルバイトに従事する学生)が10名以上いたことから裏付けられる。1期から継続して参加した学生もおり、今後も関係性の継続が期待される。

4) 第2期事業に係る学生の感想

2期についても意見交換会は実施できなかったため、アンケート結果から一部抜粋して紹介したい。良い点に関わるコメントは以下のようなものがあつた。

「単純に農作業のお手伝いをするだけでなく、農家さんとその御家族と交流することが出来ました。勉強になると感じる事が多く、良い経験になりました。」

「朝早く大変なこともあるが、農作業を通して第一次産業の難しさなどを知ることができました。また、新鮮な野菜をもらうことができて嬉しかったです。」

「名寄でたくさんの農作物を育てていることに気づけた。また、農家の作業の大変さを知る良い機会となったと感じる。」

また、大変な点としては、早起きがあげられていた。5時パターンの場合、最低でも4時半集合となり、夜型生活が多い学生にとっては厳しい条件であろう。また、カボチャの収穫が大変だったとの声もあつた。重量野菜であることから、収穫や調整作業に体力・腕力を要するためである。

この他事業の改善案として、

「前回の作業の様子などを、募集と一緒に載せれば、どんなことをするのか分かりやすくなると思います。」

「服装や気候のことを事前に知らせて頂けたら良かったと思いました。想像以上に日差しが強い日が多かったり、ハウスの中で作業をしたりと暑いので、帽子や着替えが必要などといった情報を知っておきたかったです。」

といった作業環境・内容に関するコメントがあつた。いずれも動画・文章で説明している内容だが、より伝わるよう改善していきたい。

作業環境としては、「休憩が何分に何回あるのかが、農家さんごとにバラバラで、皆さんはどれくらいの間隔で取っていたのかなと思いました。私は水が取りたいと中々言い出せず、言うのも勇気がいるので、かなり日が照り付けているときは、2時間に一回位休憩ではなくとも、水を飲む様に声かけしてくれたら嬉しい

なと思いました。」といったコメントもあった。熱中症対策は非常に重要であるため、農家・学生双方へ注意喚起をしていきたい。

そのほか、農家との連絡方法を電話以外の方法で行いたい、有償部分の昇給等の要望があった。次年度以降、より良い環境を求めて検討していきたい。

5. おわりに

以上のように「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、単なるアルバイトだけではない付加価値として、ボランティア活動による金銭以上の価値を学生が持ち帰れる取り組みとして定着しつつある。そのためには、食農教育の視点を学生・農家両方が持つことが必要であり、単純な作業・労働力ではなく、多様な経験(農家との会話等も含む)をベースとした名寄ならではの体験・経験を提供する事が求められる。アンケート結果から、完璧とは言えないまでも、この取り組みに関して一定の評価が得られ、学生のレポートにつながっていることが明らかになった。

本年はコロナ禍における影響を受け、かなり制限した状況下における活動となったが、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター・名寄市農務課・JA道北なよろ営農部営農課の協力を得て、実施体制を作ることが出来た。この場をお借りして、関係各位に深く御礼申し上げます。

次年度はコロナ禍における影響が残る中で、より多くの学生に周知し、安全に参加していただけるよう、更なる工夫を続けていきたい。

参考文献

今野聖士(2019) 援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第3号(通巻37号): 31-40.

今野聖士(2020) 援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望. 名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第4号(通巻38号): 33-40.

【付記】

本稿は、2020年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター課題研究による「農業雇用労働力狭隘下における学生援農アルバイトによる労働力支援事業に関する研究」における成果の一部である。

「2. 援農ボランティア事業実施の経緯」は2019年度の筆者原稿から再校正の上収録している。初出 今野(2019)。